1997年７月17日　発行

長野市立

博物館だより　第39号

長野市小島田町1414 ☎026(284)9011

特別公開

東筑摩郡波田町　盛泉寺所蔵

銅造菩薩半跏像

（波田町指定文化財）

７月13日(日)～８月10日(日)

（写真提供　長野県立歴史館）

天陽山盛泉寺（曹洞宗）所蔵の古代の銅像菩薩半跏像。

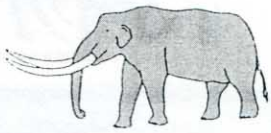
信濃への仏教伝来を考えるヒントの一つに古代の小金銅仏（大きさ数十センチ）があります。小金銅仏は、日本では６世紀末ごろから７世紀の終わりころまで多く造られ、その大きさから私的な念持仏として信仰されたと考えられます。その後、律令国家の成立とともに、氏族で信仰されていた仏教は、鎮護国家を願う国家仏教へと変わっていきました。

そうした古い時代の仏教のあり方を示す小金銅仏が、県内にもいくつか伝えられています。ここに紹介する盛泉寺の仏像もその一つです。

総高22.0cm。頭部は髻を結い、特色ある三面頭飾をつけ、髪は髪際中央でふりわける。身には胸飾をつけ、天衣をかけ、台座上に大きくかかる裳をつける。鋳造技法は臘型を用いて一鋳する。銅厚は総じて薄く、最大で７㎜。表面は火中にあったため肌荒れがあり、鍍金も確認できない。台座を別製で造ることを特徴とし、現在のものは後補。（文責　降幡　浩樹）

茶臼山自然史館　第11回特別展

「アケボノゾウの化石」

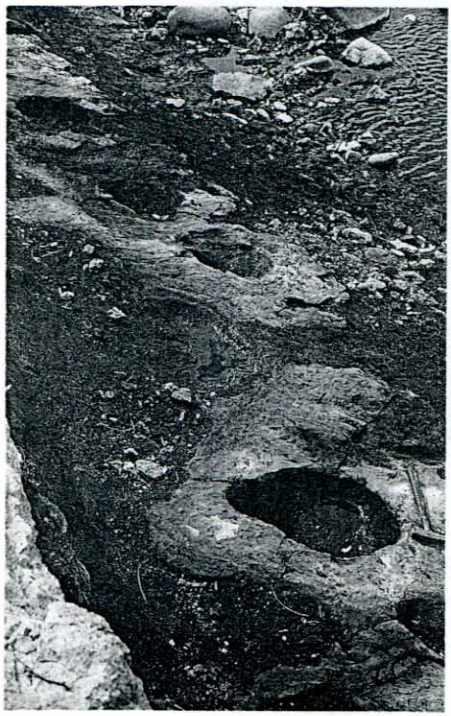


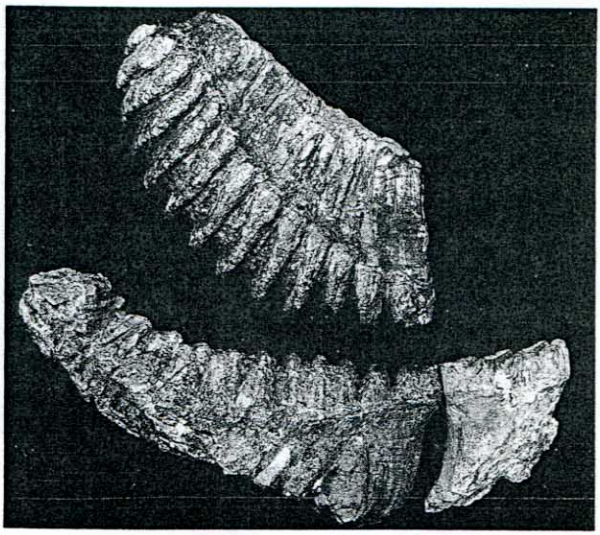
平成９年７月19日(土)～11月３日(月)

自然史館では、この夏に特別展「アケボノゾウの化石」を開催します。今から９年前の６月、小県郡東部町の千曲川沿いの崖からアケボノゾウの化石が発見されました。この化石は発見者の井出秀夫さん（小諸市）と長野市立博物館によって発掘され、これまでに切歯（キバ）・臼歯・肋骨などの化石が20点以上もみつかっています。今回の特別展では、これらの化石を中心にして、アケボノゾウの足跡の化石や植物の化石などを展示します。

アケボノゾウは、約250～70万年前に日本にすんでいたゾウです。肩までの高さが大人でも２m以下しかなく、ゾウの仲間としては小型です。県内では、東部町～北御牧村周辺の千曲川沿いからたくさんの化石が発掘されています。

この地域の地層からは、ゾウの骨のほかにも、アケボノゾウの足跡の化石や立ち木の根元の化石・植物の化石などがたくさんみつかります。いろいろな化石や地層の様子などを細かく調べると、アケボノゾウがすんでいた当時のようすをくわしく復元することができます。アケボノゾウの楽園だった当時の信州がどんなところだったのか、太古の自然に思いをめぐらせていただきたいと思います。（文責　畠山　幸司）





▲アケボノゾウ右上顎第２大臼歯
と右下顎第２・第３大臼歯

◀アケボノゾウの足跡化石（北御牧村布下）

地域探訪『千曲川』その②　～千曲川通船と善光寺御開帳～

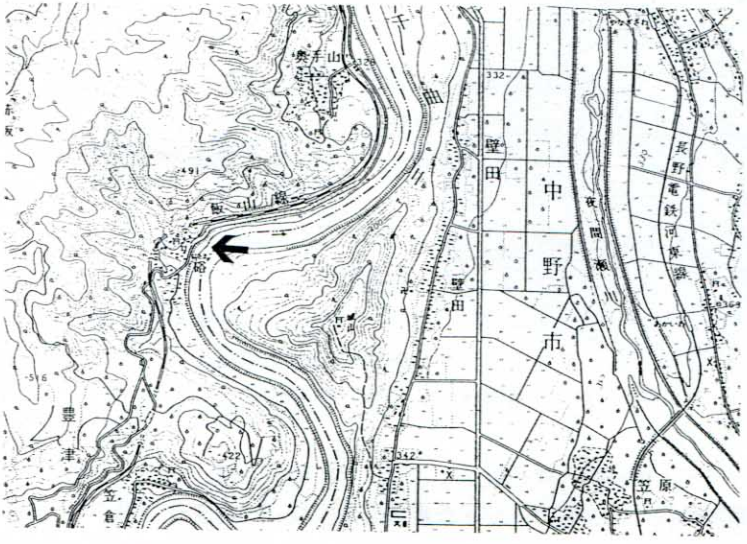
今年４月、善光寺では戦後10回目の御開帳が行われ、全国から510万人余が参詣に訪れました。

寛政11年(1799)４月、同じく善光寺は五ヶ年の全国回国開帳終了と、四万五千日の回向開帳も重なりにぎわっていました。そんな折り、参詣者を乗せた通船が転覆、百余人が溺死するという事故がおこりました。当時、千曲川通船を独占していた西大滝村(飯山市)の太左衛門の記録(斉藤家文書・長野県立歴史館寄託)によると、ことの顛末は以下のようです。

４月９日、西大滝から油粕、塩などを積み千曲川を上った通船は、途中飯山、福島で積荷を降ろし、長沼河岸まで下った。そこで、善光寺への参詣をすませた老人や子供を空船で帰るよりはと船頭、棹取の善意で船に乗せ、四ッ半時(午前11時ころ)出帆。一行は、飯山藩領笠倉村・硲地籍(豊田村)を通過中、乗船者オーバーと、時ならぬ高水のため岩に乗り上げ転覆した。死者は飯山町21人、西大滝・桑名川村11人など80余名、生存者はわずか17名の大惨事であった。この事故を聞きつけて、蓮村をはじめ近在の人びとが救助にかけつけたが手遅れだったといいます。

「西大滝村破船二付　浮遊雑物一件」には、弁当箱、数珠、風呂敷、帯など死者が身につけていたものが千曲川沿いの田上村、飯山町など12～13ヶ村から届けられ、事故の惨状がうかがえます。

寛政２年(1790)、中之条代官野村八蔵から許可された千曲川通船は、松代藩領内の福島宿(須坂市)から西大滝(飯山市)までの13里(約52km)で、物資の運搬・流通業を始めました。本来この通船に人を乗せることは許可されていませんでしたが、老人や婦女子を助けるという善意があだとなってしまった悲しいできごとでした。太左衛門は事故の翌年、多くの死者をだした西大滝に「溺死亡霊供養塔」を建てその霊を弔い、毎年の供養を怠らぬよう子孫に書き残しています。　（文責　降幡　浩樹）



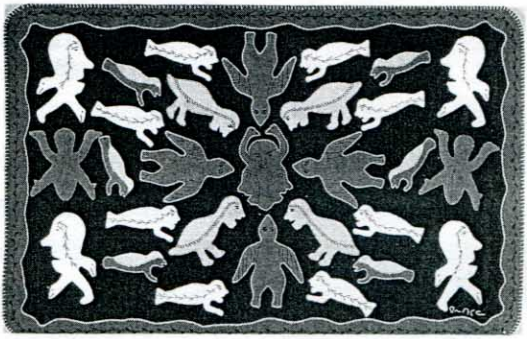
▲通船転覆地

溺死亡霊供養塔（飯山市西大滝）▶

•長野オリンピック文化・芸術祭参加プログラム

極北のイヌイットアート展

と　き：７月26日(土)～11月９日(日)
（７月26日は午後２時開館）
ところ：博物館特別展示室
入館料：無料



イヌイットになる▶
アイリーン・アヴァラキアック
カナダ　ノースウエスト準州ベイカー・レイク
ウール／121×188㎝

◘北極圏とは

北緯66度33分以北の地域が北極圏で、１年のうち200日以上は氷点下が続き、冬はマイナス40度まで下がります。夏でも15度にしかならず、８週間で短い夏は終わります。世界でも有数の過酷な環境にあるのが北極圏です。

◘イヌイットとは

北極圏に住む先住民のうちで最も大きなグループで、イヌイットはかつてエスキモーと呼ばれた人々の自称でもあり、イヌイット語で「人間」を意味しています。

◘イヌイットの暮らしと芸術

イヌイットは、厳しい自然環境のもとで、サバイバルのため、ありとあらゆる適応の業を身につけ、独自の生活様式や文化を築いてきました。

かつて狩りや漁をしながら遊牧生活をしていたイヌイットも今では定住生活を送るようになり、スノーモービルで狩りに出かけます。生活がどんなに便利になろうとも、彼らの中には自然との適応の知恵と工夫が受け継がれています。

イヌイットは、土地や水、そして地球上のすべての生き物を生命の源として尊敬を払い、生きてきました。石の彫刻、セイウチの牙やカリブー(トナカイ)の枝角の彫刻、クジラの骨の彫刻、版画、タペストリーなどの工芸品は、彼らの日常の暮らしぶりや動物との密接な関係を豊かに表現したものです。

◘展示の主眼と内容

北極圏という過酷な環境の中で、長い間にわたって、適応し、調和してきたイヌイットの人々は「自分たちを取り囲むもの全てを思いやり、親切に生きなければ、自分たちの存続も繁栄もない」という哲学を持っています。彼らの工芸品は、そうした哲学を具体的に表現したものとして、本当に生きるとはどういうことかを私たちに語りかけ、環境保全の意味と重要性について、問いかけています。

本展では、現代イヌイットの人々の工芸品約70点を展示します。また楽しみながら、イヌイットの生活が疑似体験できたり、ビデオ上映、コンピューターを使っての学習など豊富なプログラムが用意されています。

なお、第２期として平成10年１月22日～３月29日にも内容を新たにして開催する予定です。

（文責　山口　明）